

伊豆市未来づくり 個別セッション

「次代を担う人づくり」 第1回(2014/7/13 実施) 発言要旨

座長	相模女子大学学芸学部 子ども教育学科教授	久保田 力 氏
有識者	小田原大学保育学科准教授	菊地 篤子 氏
市民代表	修善寺温泉場まちづくり検討会	原 京 氏
	社会教育委員長	澤木 育子 氏
	子ども子育て会議	梅原 龍一 氏
	静岡グッドトイ委員会代表	田足井 みさ子 氏
	NPO 法人伊豆市リトルシニア監督	土屋 英治 氏
	伊豆市議会議員	青木 靖 氏
	行政改革推進委員	佐藤 傳 氏
	行政改革推進委員	宮地 あけみ 氏

市長 ○これまで学校再編など数と場所の調整ばかりに注力してきた印象がある。ここでは「人づくり」の質について議論いただきたい。その前提として、よい教育の定義についても考えていただき共有してほしい。人口減少対策には教育も大切であり、ここに来れば良い教育が出来ると親に認識してもらうことも大切だと考える。

座長 ○6月1日の全体セッションでは、伊豆市は1つの市としてまとまりがあるか、そもそもまわりにあきらめムードがある、といった問題が指摘された。この個別セッションでは、「人づくり」の観点から、伊豆市が財政破綻に向かわないようにすることを目的に、フロアからも意見を頂戴して多くの意見を伺いたい。
まず自己紹介からお願いしたい。



土屋氏 (NPO 法人伊豆市リトルシニア監督) ○牧之郷在住、伊豆市リトルシニア(中学生の野球チーム)監督。修善寺工業高校の野球部監督をしていた経験を活かして、10年前にリトルシニアの活動をスタートさせ、翌年に静岡県からNPOの法人格を取得。

○伊豆市リトルシニアには、現在、中3 15人、中2 21人、中1 29人の計65人が参加。伊豆市のほか沼津、裾野、御殿場、三島、伊東、河津、熱海、戸田の中学校約25校から生徒が集まって、伊豆市のグラウンドで練習している。指導者は約20人で、銀行や製造業など異業種で構成。野球経験者は少ないが、勉強を教える、地域のことを教える、社会での経験を教えたいといった観点で参加している人がいる。

○最初は伊豆市の子どもを集めるつもりだったが、なかなか集まらなかった。そのうち伊豆の国市の子どもの多くなって伊東市からも参加するようになり、東部広域から子どもが集まる。伊豆市

よりも他の市町の子どもへの参加が多い。

○「野球を通じた人づくり」として立ち上げたチーム。練習は土日に実施、平日は子どもは学校の部活や塾に通う。塾や学校のクラブ活動を優先しており、月に一度は「家族の日」を設けて野球の練習を行わない、練習休みも多い。

練習後に、指導者が過去の経験談を話したり、勉強をみたりする。

英数ではテストを行い、成績が思わしくないと練習を休んで勉強するよう指導する。

○伊豆市のまとまりについてはよくわからない。子どもが、親や祖父母を引っ張ってくることも多い。



梅原氏（子ども子育て会議） ○修善寺駅前在住、旧修善寺工業高校のレスリング部 OB。現在は伊豆総合高校から場所を借りて、幼稚園から中学生



までの子どものためのレスリング道場を主宰。多い時で50人、現在は25人ほどが参加。修善寺中学が荒れたときにPTA会長を引き受けた経験などを踏まえて、経験することで判断力がついて、ものごとが開けていくと考えに基づく。人間の一番の基礎である「健康で体力ある子を育てる」という方針で活動。

宮地氏（行政改革推進委員） ○栄養士として長く勤務し、食育会議会長を務めた。

○在宅の栄養士として子どもの健診や大人の栄養教育などを担当してきた。最近ではベビー手話（赤ちゃんとのコミュニケーション・ツール）の普及に努める。主宰するベビー手話は生涯学習の目的で行っており、市内8組、市外2組、計10組の親子が参加。三島や沼津では多くの参加者があるが、伊豆市からはやや低調。

○その原因は、興味がないからではなく、情報が流れない、家の中に入っているのが理由だと考える。ベビー手話でなくても、集まる場所が欲しいと考えている母親が多い。三島などではフェイスブックで情報交換している母親が多く、口コミで情報が伝わりやすいが、伊豆市では電話かメールで連絡しているのが現状。FM ISで情報を流してもらったこともあるが、母親が聴いている時間帯でないと情報が伝わりにくい。



座長 ○情報を流す方法は今後考えていかななくてはならない課題の一つ。興味を持ってない前段階として情報が入ってこない問題を改善したい。

原氏（修善寺温泉場まちづくり検討会） ○修善寺の寺の前で茶屋を経営、5人兄弟の末っ子

として温泉場で育った。伊豆市になったときに修善寺の人間として、自分の故郷に海ができた、わさびの名産地になった、と喜びを感じた。地元の駿河銀行に就職したものの勤務地はずっと東京。15年ほど前に難病にかかったことをよいきっかけと考へて、銀行を退職して故郷に戻った。故郷で友人たちに助けられ、娘に励まされて療養していたところ、教育委員の話を受けた。身体の具合が悪かった時や台風被害を受けた時にまわりに助けられて、東京にいたら味わえないよい経験をした。伊豆市に戻ってきてよかったと心から感謝している。○伊豆市になって2年目くらいに教育委員を引き受けて現在に至っている。子ども達との直接の関わりでは、修善寺小学校の総合学習で観光について教えている。



菊地氏（有識者、小田原短期大学）○三島で生まれ育ち、大学時代を京都で過ごした。結婚後は瓜生野在住。



○3年前までは伊豆市の事業にも参画、旧修善寺町や旧中伊豆町の頃から関わっている。心理士として、健康増進課で乳幼児健診、事後教室、療育教室、巡回相談で幼稚園やこども園を回って、平成22年から2年間は教育委員会・学校教育課で教育支援コーディネータとして小学校や中学校を回った。赤ちゃんから中学生、そして保護者や先生方を相手に仕事をしてきた。当時から大学では非常勤で勤務していた。

○専門は子ども学で、0～1,2歳の乳児保育や発達心理学。ライフワークとして男女共同参画の「みんなで子育て」を推進。イクメンが流行語になって、社会的にも子どもに対する意識が変化したと実感。

座長 ○私の専門は子育て支援。自分たちが交替です、行政に頼らない、ニュージーランドの子育てが印象にある。日本では行政が教育を担うようになって行政に頼ることに慣れてしまったことをやや批判的に考察。子育てしてくれるところを探す親が多く、保育園を作ると預けたい人が増えるという現象が起きる。こうした構造を断ち切りたいと考えている。

田足井氏（静岡グッドイ委員会代表）○原保在住。幼稚園勤務だったが下の子が障害児だったことから仕事を辞めて、保育園や幼稚園、デイサービスや支援学校などを対象にした人形劇を始め、絵本作りなどに活動を広げた。「おもちゃコンサルタント」資格を取得し、その後最上級の「おもちゃコンサルタント・マスター」を取得。伊豆市主任児童委員（4年目）として子どもに関わる。



○伊豆市の廃校を利用して、東京おもちゃ美術館の姉妹館をスタートさせたい。おもちゃの広場では、木のおもちゃなど、個人ではなかなか手に触れることができない木のおもちゃに触れる活動を推進。活動の拠点として静岡グッドトイ委員会を立ち上げ、地元の木を使う「ウッドスタート宣言市町村プログラム」への参加を伊豆市に提案する。

佐藤氏（行政改革推進委員） ○八木沢在住、10 年前に修善寺南小学校を退職し、現在は行政改革委員。平成 17 年頃から伊豆市で毎年 100 人くらいずつ子供が減少していることに危機感を持った。地域の子ども会活動が成り立たなくなってきたことをきっかけに市内で活動を開始。海がある土肥では砂の造形大会を開催、3 世代交流グランド・ゴルフなども実施。地域の教育力を活かして、豊かな心を育む、小さい時から心に響くよい体験をして伊豆市に役立つ人に育てることを目指す。



○土肥で「通学合宿」を始めて 10 年目。共同生活を通じて子どもたちが互いを思いやる気持ちを育てる。土肥高校・輝潮館（宿舎、30 名程度収容）での 6 泊 7 日の合宿。土肥の通学合宿は 4,5,6 年生を集めて、日中は平常通り学校に通って夜を宿泊所で過ごす。高校生が子どもの世話をし勉強を教え、82 歳の老婦人が料理を担当するなど PTA や民生委員など地元の人への 100 人程度ボランティアとして協力。

○「伊豆市子ども会育成連合会(市子連)」では、4 地区の子ども達の交流活動で、中伊豆・萬城の滝のキャンプ場の川でニジマスを掴み取りして焼いて食べたり、火おこし体験を実施。そのほか、天城ドーム、虹の郷、土肥などで大人の役員が付き添って活動。小学 5-6 年生対象のリーダー研修では、リーダーとしての心構えを学ぶ。

青木氏(市議会議員) ○市議会議員の立場で参加。最初に指摘された伊豆市のまとまり感については、あるようなないようなという印象。大妻女子大生が作成した 10 周年記念のキャラクターは 4 人がそれぞれに特徴を生かす、とてもいいことだと思う。その上に四つ葉のクローバーがあって、葉はそれぞれ別々だが、もとのところで 4 つが結ばれている。旧 4 町があるのは歴然たる事実だが、伊豆市で生まれた子供が 10 歳になって、この子ども達は交流を重ねてきて育ってきた。伊豆市のまとまり感は、今後できてくるだろう。



○一方で、子どもの数が減少しているという事実があり、子どもを持つ世代が困っている現実もある。

子どもがいる家庭であっても各家庭には 1-2 人の子どもしかいない。その上、子ども達がすごく忙しい日々を送っている。

○子どもは少ないが大人は多い。「人づくり」では、子どもだけでなく親やその上の世代の大人が、再び学ぶことも必要ではないか。

座長 ○「人づくり」は青少年だけが対象ではなく、幅広く考えたい。たとえば東京都町田市では祖父母が立ち上がって、自ら孫育ての勉強を始めようとしている。

澤木氏(社会教育委員長) ○伊豆市発足以来、社会教育委員の仕事が続いている。大学時代を東京で過ごし、帰りたいわけではなかったが天城湯ヶ島町に戻った。「伊豆はいいところ」だと言われたが、その認識を持つまでに何 10 年もかかった。



○あるお姑さんの失敗談をそのお嫁さんに話したところ、姑としての威厳がなくなるので失敗談を嫁に話さないでほしいと言われ、衝撃を受けたことがある。社会教育委員の仕事がわからなくなることが多くなって、社会、学校、地域を変えていかなくてはならないと感じている。伊豆市には若者の意見が通り難い文化があるということと、湯ヶ島に結婚していない中年男性が多いことを、委員をして痛感している。

○「伊豆っ子宣言」といったものが必要だと考えて、原氏とともに伊豆ならでは宣言を作ろうと活動中。誇り、プライド、持続可能な力を持った子供に育ててほしいといった内容。それにはみんなが変わらなくてはならない、オトナやお年寄りが変わらなければ次世代は育たない。

○個人的には、井上靖ふるさと会で 2007 年生誕百年祭を開催。原田真人監督が映画化した「わが母の記」をどのくらいの伊豆市民が観に行ったか、考えることもある。子どもたちにもっと伊豆の文学を味わってもらうことを提唱したい。

○このセッションも参加者の多くは市の職員。市民参加をもっと進める方法も考えたい。

座長 ○具体的な内容は議論するとして、「伊豆っ子」宣言のようなスローガンを作るのはいいかもしれない。

○「人づくり」に取り組む、その背景と条件について考えたときに、若い人の意見を吸い上げる力が上の世代にないのであれば、どうすればいいか、これも論点になる。

○「次代」とあるが、ここでの「人づくり」の対象は若い世代だけでなく、すべての世代が対象。

○合併後 10 年経ったとはいえ、伊豆市の一体感あるいは所属意識はどのくらいなのか、4 地区のまとまりはあるのか？フロアを含め多くの意見を頂戴したい。

(フロア・市長) ○指名されたので一市民として口火を切りたい。私は天城湯ヶ島に帰ってきたいと思っていて、市長の話があった 7-8 年前に戻ってきた。修善寺、土肥、中伊豆が自分の生まれ故郷になったことが嬉しかった。

○そうはいつでも、何でもかんでも一緒というわけではない。市という行政組織のリストラ(再構築)は行われたが、各地域のよさや歴史を残していくことも重要。



(フロア・副市長) ○伊豆市の行政職員として 10 年、

行政として伊豆市を創る仕事をしてきたので4地域を区別して考えることはない。各町に行くと違いが残っていることもあるが、それは村の集合体として認識している。

座長 ○伊豆市の4地域での交流も重要。市の老人会の野球やバレーといった活動で、4地区合同のチームや文化活動はあるか。各世代では4地区でどのような活動があるか。学校関係で伊豆市全体を意識した実践活動はあるか。

(フロア・教育長) ○伊豆市文化協会では、各地区持ち回りで市全体の発表会を開催。学校関係では、就学前児童では幼稚園や保育園で、義務教育では、それぞれの学校で練習してきたものを一か所に集まって発表する、音楽発表会がある。市としては小学校の陸上記録会があって、各学校がまとまって一つの競技に取り組む種目もある。

(フロア) ○3月まで子ども園の園長。保育園職員は市内全域で異動するが、異動すると土地柄がよくわかる。土肥は1園なので、子どもを地域で面倒見て地元で大切にしてくれる。
○保育園では、2つの保育園合同で子どもを遊びに連れて行ったり、海岸に一緒に行くなど、園同士の交流も図っている。天城地区では、湯ヶ島だけでは人数が少ないので、地区合同運動会を実施。

(フロア) ○小学校主任教諭。修善寺・熊坂小では、3年生の地域学習で、社会科と総合的な学習の時間を合わせた「伊豆市を知ろう」がある。市バスで市内各地域を回っており、他の地区では、昭和の森、天城峠、萬上の滝などを回り、昔から伝わる椎茸やわさびを体験。熊坂小の地元・修善寺では、生徒がもっと知りたいところにそれぞれが電話して小グループで回る。ほかの学年でも伊豆市でしか学べない授業がある。

梅原氏 ○あくまで個人的な意見だが、私は少し違う考えで、皆で仲良く一緒にという仲良しグループを変に作るのではなく、市内では他の学校や他の地区に負けるものか、でいいのではないか。それが広いところに出たときに伊豆市としてまとめられればいい。普段の大会では各学校がそれぞれに頑張って県代表になる、国体では県の代表として指導する。こうした指導の仕方、まとめ方でいいと考える。

座長 ○私もまさにその通りだと思う。何でもかんでもいつでも「一体」という発想ではなく、何かあったときに「一丸になれる」、こうした力を作ればいいということだろう。

菊地氏 ○自分自身が小さかった時のことを考えても、三島市民としての強い誇りがあったとはいえない。あったのは小学校、中学校としての集まり。小・中・高と進む中で、もとの集合体への帰属意識があればそれが醸成されていく。高校生の息子を見ていると、高校生になって枠組みが大きくなってきて帰属意識が大きくなったと感じる。

原氏 ○個人が把握できる範囲や人数から考えると、ほかの地域について深く考えることはなかなか難しい。教育委員を8年間務めてきて感じるのは、子どもときから鍛えないと伊豆市に対する帰属意識やプライドは育ちにくいかもしれない。

○伊豆は幕府の直轄だったが、藩だった会津には「ならぬことはならぬものです」といった「あいづっこ宣言」があり、長野県上田市には真田藩の掟を子どもに教えている。滋賀県は琵琶湖を大切にしている。静岡県ならば富士山かもしれない。天城の小学校では井上靖を読んでいるが、伊豆市ならば何か？伊豆に住む人間としての意識を醸成していき、それを受け継いでいけるようにすればいい。6月1日の全体セッションで指摘されたように、あいさつをする、そうじをきちんとする、自然を大切にする、こうした内容になるかもしれない。10年間活動していたならば、子ども達が高校生になってこうした気持ちが育ってきていたかもしれないと考えている。「伊豆っ子宣言」を創ることに大賛成である。

菊地氏 ○子どもには「伊豆っ子宣言」といったものが重要な意味を持つ。それを大人も持っていたい。ひとつ気を付けたいのは、小中で連続して取り組むときに、小学校で温泉場に行って中学で再度行くと、「また、行くの？」となりやすい。大人の意識改革が必要で、ただ見せればいいというのではない。伊豆市に対する思いを大人がきちんと持っていれば、それが自然と子どもに伝わる。

青木氏 ○昨年伊豆市には大きな変化が起きた。FM IS の放送が開始されて伊豆市が狭くなった。FM IS が伊豆市の中核になったといえる。地域や学校で田植えや畑づくりなど様々な活動が実施されていて、これが子どもの成長の過程で役に立っている。伊豆市全体の「みんなの運動会」もあって、私はその場には行けなかったがFMを通して伊豆市民は中継を通してすべて聞くことができた。10周年記念で作成した「あなたとともに」の歌を子ども達がIZU(アイゼツチュウ)というユニットを作って歌っている。このIZUに加わりたいという子どもがたくさんいる。○まとまっているかという問いには、反対に、まとまらないとできないのではないかと答えたい。まとまるためにFM IS の役割は大きい。

座長 ○FM IS はコミュニティFMのよさを出している。次に事前に出していただいた提案をご紹介いただきたい。

原氏 ○温泉場でこれまで議論してきた内容を資料にした、修善寺駅の近くに高校生のための「寮」をつくるという提案。この寮は特定の学校のための寮ではなく、伊豆市民がここからいろいろな学校に通学できる、また市内に限らず下田や松崎など伊豆半島全域から高校生を集めてそれぞれの高校に通うという趣旨。寮の運営は難しい面もあるが、修善寺から各学校に通学し、週末には自宅に帰ることもできる。異なる高校の生徒間の交流も実現でき、伊豆の高校生としてのアイデンティティも生まれる。

○伊豆総合高校・工業科は、伊豆のための技能者を養成する学校として特化してもいいのではないかと考えている。

座長 ○市立高校をつくるのは難しいが、複数の高校から生徒を受け入れる寮ならば可能性が広がる。総合高校という母体もあって、伊豆市のモノづくりに関わる人材養成もできる。

佐藤氏 ○行改プランの前の集中プランでは、伊豆市で5年間に5か所の通学合宿所をつくるという案があったが実現していない。伊豆市内では土肥の他から集めることもできるが、その場合

でも「通学合宿」は難しい。昨年は湯ヶ島で試みたが1年で終わってしまった。1週間の合宿は静岡県では土肥と牧之原の2ヶ所での実施例しかない。一番の問題は食事、焼津では弁当だったために1年で終了、お風呂も大きな問題となっている。2泊3日の合宿ならばどこでもできるが、1週間の「通学合宿」となると輝潮館がある土肥でないとなかなか難しい。

○外の地域との交流では、戸田村では長野県原村との交流があった。

田足井氏 ○ウッドスタートのひとつとして伊豆市では「木育」の観点から子どもの誕生祝品を作成し差し上げたかどうか。中伊豆中学校・体育館を木造りにするなど市の施設で木を多く使っていることは素晴らしい。木育を進める原保の子育て支援施設「ちびっこサロンわらぼ」は、中伊豆の奥地にあるが、修善寺や天城からの利用者も多い。地域の中のあたたかさや園舎の落ち着きなどが人を引き寄せているように思う。木によって人はあたたかい気持ちになれる、そのきっかけづくりになればと活動。

○「ウッドスタート市町村宣言」では、参加する8市区町村がそれぞれに適したプランを進めている。伊豆市が宣言市区町村に加わることを提案したい。

宮地氏 ○全体セッションで若い人の意見を聞いた方がいいという提案があったので、若い人で集まったが、そこでは4地区の区分けはない、今の子ども達が育っていけばその括りはなくなるという意見であった。平成元年に伊豆市に転居してきた私個人としては伊豆市という考えでいる。

○情報がいきわたっていないという観点では、ホームページも広報誌もあまり見ていない人が多い。私の活動のベビー手話はあまり知られていないために、とっつきが悪く広報が難しい面があるが、個人的な活動などは、広報誌に掲載してもらうことはできないので、母親が欲しい情報は少ない。沼津市では数人のママさんたちで営利目的ではなく、自分たちのために、ママ目線でママと子どものためのフリーペーパーを作成している。その活動費(経費)は、冊子内への広告費で賄っている。伊豆市でもきっかけがあれば、同じものがよいかどうかは別として、同じようなことができるのではないかと思う。伊豆市の情報発信(広報)の仕方に工夫が必要かもしれない。

○一方で、伊豆市の乳幼児健診はとても手厚く、自治体によっては、何十人もで説明を聞くところを個別に説明、相談を受けることが出来る。親子でいる時間もほしいが、みんなで集まって過ごしたいと希望する母親も多い。

青木氏 ○議員の立場から伊豆市の広報についてコメントすると、「広報いず」は非常によくできている。ただ、最初から最後まで読むのはたいへんで、読んでもよくわからないという声もある。ぱっとみてすぐにわかるものも必要かもしれない。待っていればいいという土地柄もあるので、わざわざ営業して発信してまで観光客を集めようとする人は少ないのかもしれない。

○移住について山梨県や長野県では受け皿を作っている自治体もある。

座長 ○広報は発信の仕方や読ませる方法に工夫が必要で、退職教員が作成していたPTA新聞よりも親たちが「子どもちゃれんじ」の付録を読んでいたということもあった。

○次回は「次代を担う人づくり」の前提としての「目指すべき伊豆市民像」に関する意見を含め、もう少し具体的に、何ができるか、何をすべきか、そのために解決すべき課題、クリアすべき条件は何か、等の議論を深めたい。広報誌の作り方や、若者の意見が反映されない文化の問題の解

消する方法などについて、具体的提言をいただきたい。

○約1か月後の次回セッション(8月17日)までに、市役所に意見提出してほしい。

